

# 子どもとトラブルと保育者

友定啓子

二〇〇八年三月、幼稚園教育要領が改訂され、二〇〇九年の春には新しい教育要領の下での保育が実施されることとなります。この夏休みは全国のあちこちで、これからの十年を視野に入れて、保育を見通す作業が始まっていることでしょう。新しい教育要領は、これまでの幼稚園教育の基本の上に立って、「幼児が人とのかわりを深めること」を重視していることが特徴の一つです。

人とのかわりはいつの時代でも課題であり、また人間の一生の課題であり、それまでのその人の体験の全てが込められたものです。第三者が、こうすればこういう力が付くと簡単に言えるようなものではありません。ただ言えることは、周囲の人と自分に対して愛情や信頼感をもてるかどうかですが、その人がつくる人間関係の根底に横たわっていて、それがとても弱い場合には、生きていく上で不安定感を抱えることになりそうだという事です。そして現実にはこの最低ラインさえ与えられず、人生のスタートのところから大きなハンディを背負ってしまう子



どもが少なからずいます。

人は経験を重ねるほどに、他者不信や自己不信に陥る機会も増え、幼児のように無条件に人を信頼することができなくなります。人を求める気持ちとは裏腹に、人と自分は違うのだと言い聞かせなければならぬこともよく起ります。

人とのかわりはいつでもトラブル絡みです。それぞれ違う人格なので当たり前なのですが、他者否定でもあり自己否定でもあり、本人にとってはつらいことで、トラブルへの対処や立ち直りが建設的にできるかどうかは、人とのかわりの大きな別れ道だと思います。

そんなことを考えながら、今私は数人の仲間と「幼児同士のトラブルに保育者はどうにかかわっているか」という研究に取り組んでいます。たいして目新しいテーマでもないのですが、保育記録の収集や保育者へのインタビューを通じて、いろいろな言葉に出会いました。その中で、キーワードではないかと思っただけの言葉が幾つかあります。「トラブル場面はトラブルではない」「トラブルは成長を見る場面」などです。トラブルは当の子どもにとっては困った場面ですが、保育者にとってはちっとも困ったことではなく、「子どもが育つ場面」そして時には「うれしい場面」にもなるようです。保育者はそれまでの成長を見続けてきているので、トラブルの様子や対処の仕方にその子の成長をすぐに見てとることができます。

いつもは相手に殴りかかっていく子どもが、今日はそれをやらないで一生懸命言葉で訴えていることに気づいたとき、トラブルには違いないけれど、保育者にとってはそれだけでもうれしい姿です。「たたかないで口で言ったらわかるよ」と伝え続けてきたことが、あの子の心とからだで育まれたのだとわかるからです。トラブルのように自己感情にかかわるものは、人に教えられたからといって知識のようにするりとは吸収できなくて、行動に表れてくるまでには、時間がかかります。保育者はトラブルの場面で、子どもの自己回復を助けたり、双方の気持ちをつないだり、解決策を一緒に考えたり、ものの考え方を教えたりしますが、それがその子にどう取り込まれたかはそのときにはわかりません。それは、それこそ次のトラブルのときにわかるのです。あるいはトラブルが起らないということでわかることもあるでしょう。

『ごめんね』『いいよ』で終わるんじゃなくて……』という言葉も、繰り返し聞きました。トラブルを善悪だけで表面的におさめてしまうことへの戒めではないかと解釈しています。トラブルは痛い思いやつらい思いをしながら人と人が本音で出会い、それぞれが折り合いをつけ、相手と自分を理解し信頼を回復する過程です。そして、トラブルの解決以上に、それに至る過程で相手を理解したり自分が理解されたりして、相手とつながることが大事なのだと思います。関係を回復できたといううれしい経験、関係は回復できるという経験として残ってほしいと



思います。自分が失敗しても許してもらえ、逆に相手の失敗を許してやれるという深いかわりが、自分と相手を支えるのではないのでしょうか。

子どもたちが「あの子はきらいだ」「もう二度と遊ばない」という関係にならないように、行き過ぎた自分にも気づくように、保育者たちは心を砕いてトラブルにかかわっています。そういう体験の繰り返し、幼児が人と自分を信頼することにつながっていくのだと思います。

そして五歳児になると、それまでのトラブル体験の積み重ねを背景に、子ども自身が、トラブル回避・解消・解決に向かおうとする姿に結実していくのだと思います。そこには、人と受け入れ合う関係を持続させていきたいという子どもの意思を見ることができません。こういう持続的な関係をつくりながら、協同する経験も重ねていくのではないのでしょうか。人とのかわりを十分に体験できる保育の場で、立ち直りを支えてくれる保育者とともにある保育の日々は、何度でもやり直しのさく練習の日々でもあり、人とかかわる本番そのものであると思います。

(山口大学 教育学部)

#### 参考文献

友定啓子他『「ごめんね」の向こうに―幼児同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか 保育事例集―』二〇〇八年